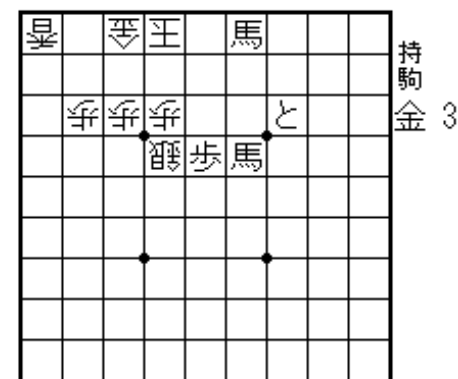


解説の部

第1番



▲62金 △同金 ▲52馬 △同金 ▲71金 △51玉
▲62馬 △同金 ▲42金迄9手。

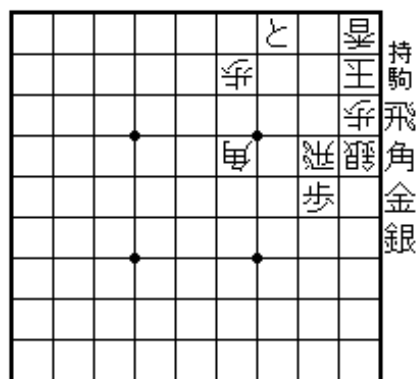
処女作。大学4年のクリスマスイブ（＝掲載誌の発売日）に唯一もらったプレゼントだった。22歳のデビューは相当遅いほうらしいが、当時はそんなことは露知らず、もちろん仲間に見せまくるという儀式も忘れなかった。

9筋が開いていることに着眼すればおしまい、という感じで難しいところは皆無であるが、62金～52馬の手触りのよさと62馬のダイビングの気持ちよさでまあ作品にはなっているかと思う。

なお、64銀は初手52馬～63馬の筋を消すための駒であるが、別に香でも桂でも、また83歩～桂でも良い。ここではあえて実戦形にこだわってみた。

（将棋マガジン H5・2）

第2番



- ▲32飛 △22桂 ▲21角 △23玉 ▲34銀 △同飛
- ▲33飛成△同角 ▲32角成△12玉 ▲23金 △同銀
- ▲21馬迄13手。

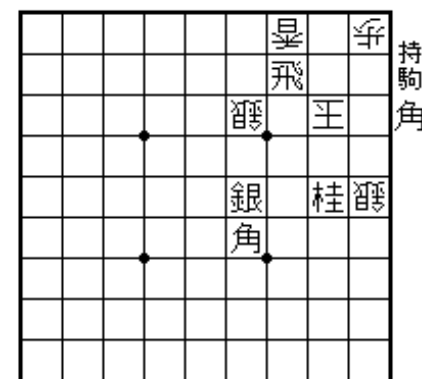
詰将棋の専門誌である詰将棋パラダイスの初入选作。私とも思えぬ素直な作品でのデビューだった。

2手目他合は21銀、23玉、45角、34合、同飛成で詰む。この変化のおかげでなんとか入選級になったのだが、実はこれは大学将棋部の後輩の小林哲君に見付けてもらったもの。原図は25歩→36桂で2手目他合は24桂以下という平凡なものだった。これだと収束に遊びも成立してしまうため、彼には大感謝しなくてはなるまい。

なお6手目同桂には12飛成がある。この変化で植田尚弘氏が1作発表していたのを見て、少し嬉しかった。

(詰将棋パラダイス H5・8)

第3番



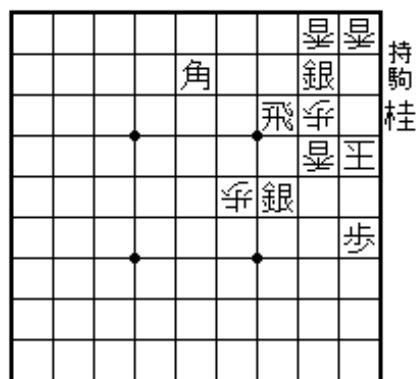
- ▲33飛成△14玉 ▲32角 △同香 ▲23龍 △同玉
- ▲13角成迄7手。

3手目の焦点打が主眼。25玉に36龍で詰ますため、この手は限定打になっている。収束も軽くまとめて、まあよくできたほうだろうか。2手目同香は41角、22玉、13角成以下同手数駒余りになる。

発表時は玉方36歩が置いてあった。初手33桂成、14玉、36角の余詰を消すつもり配置だったが、よく見ると36角に25飛合で逃れている。とどのつまり、不要というわけで今回排除するにいたった。これだと4手目同銀が変同になってしまうが、まあそれはそれで仕方がない。推敲もへったくれもなく投稿していた初期の頃の作品。なお、解説の若島正氏から32飛を持駒にする案も提示されたが、41角の筋があるのでそれで作るの難しいと思う。

(将棋世界 H5・9)

第4番



- ▲13銀成△同香 ▲26桂 △同香 ▲15歩 △同玉
- ▲24銀 △14玉 ▲15銀 △同玉 ▲35飛成△14玉
- ▲25龍迄13手。

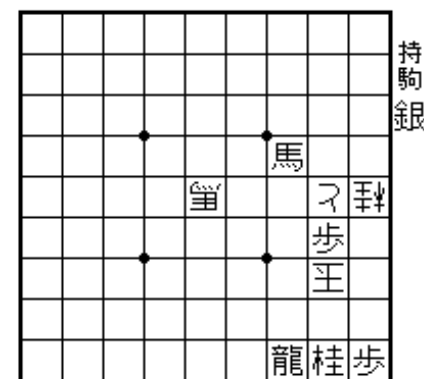
大学時代は指将棋と麻雀にあけくれていたような気がする。麻雀のメンバーは大体固定されていて、その内の一人が必ずといっていいほど遅刻してくる。その待時間に私はよく自作の詰将棋を見てもらっていた。

この作品も出したことがあった。囲碁が本職のHが『こんな手はどう』と銀を引っくり返すとAが『それは意味ないよ』なんて戻したりして、もう私はほくそえむばかり。ところがなにやかやといじくりまわす内に、Aが初手15歩から24銀で強引に詰ましてしまった。私はがっかり、二人は大喜び。いやなやつらだ。

余詰防止の45歩を置いた頃、ドアをノックする音がした。『やっときたか』『じゃはじめましょ』。マグネット盤がこたつから消えた。その日の麻雀は勝ったんだっけか。うーん、もう覚えていない。

(将棋世界 H5・10)

第5番



- ▲18銀 △26玉 ▲17銀 △27玉 ▲16銀 △同と
- ▲45馬 △同馬 ▲37龍迄9手。

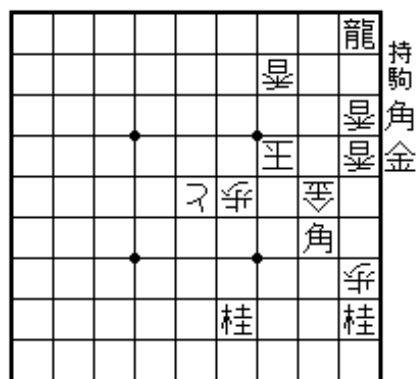
初手16銀は同玉、25馬、27玉で28歩が二歩で打てない。また、5手目45馬は36桂合でぎりぎり逃れている。

盤面がない方がよい、という駒を置いて、それを消しにいく邪魔駒消去という手筋。この手筋はバリエーションが多く、作家にとって非常に魅力的なテーマになっている。この作品では18銀~17銀~16銀という銀の動きを26歩という邪魔駒1枚で表現してみた。

6手目同玉は36龍以下。初手16銀ではこの手ができないわけである。

(将棋マガジン H6・4)

第6番



- ▲44金 △24玉 ▲22龍 △23金 ▲34金 △同玉
- ▲32龍 △33香 ▲43角 △24玉 ▲36桂 △同香
- ▲15角 △同香 ▲25角成△同玉 ▲16金 △同香
- ▲26香 △15玉 ▲35龍 △14玉 ▲25龍迄23手。

8手目33桂は43角、24玉、36桂、同金、23龍、同玉、24香、同玉、34金以下。発表時約3割の解答者がこちらの順を答えて誤解となった。15角の一手を中心に序と収束を付けた作品だったが、主眼手に魅力がないかわりに全体のバランスが均一化され、かなりの好評価を得た。竹村孔明『8手目の合駒の綾がいいですね。特に桂合の変化が魅せます。

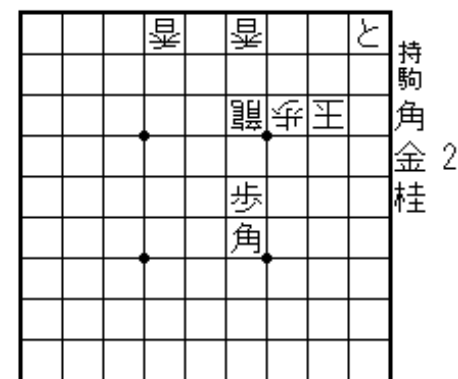
手厚い作品で解けた時の充実感100%』

鈴木章夫『新年早々、すばらしい傑作に出会えた』

詰パラはなんといっても解答者の生の声を聞けるのが魅力。創作意欲の源はここにあるといつてよい。

(詰将棋パラダイス H6・1)

第7番



- ▲15桂 △①22玉▲13角成△同玉 ▲35角 △22玉
- ▲23金 △31玉 ▲53角成△42香 ▲21と △41玉
- ▲32金 △同玉 ▲31金迄15手。

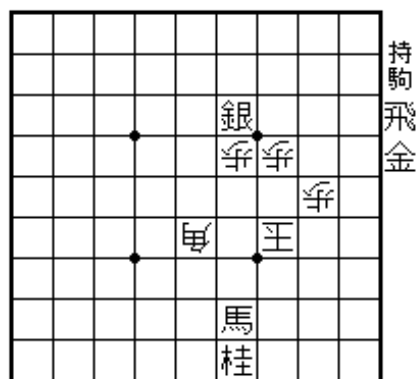
①32玉は21角、42玉、43角成、同玉、44金、32玉、23桂成以下。

3手目23金とすると、31玉、53角、42香、21と、41玉で左に遁走されてしまう。そこで13角成～35角と事前に打ち換えしておけば53角が馬になるので収束に入れる、という仕掛け。

余詰回避と変化のための61香配置は仕方の無いところで盤面8枚におさまってまずは満足のいく出来。勝算があったわけではないが、第4期C級順位戦に出品、主題の明快さがうけたのか首位作となった。

(詰将棋パラダイス H6・12)

第8番



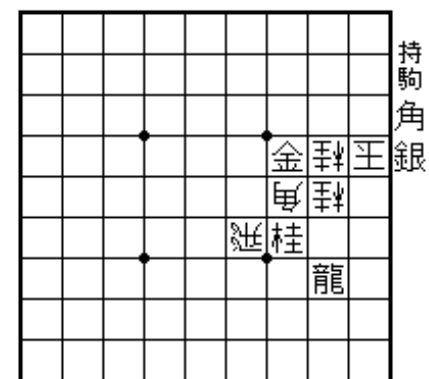
- ▲37金 △45玉 ▲35飛 △同歩 ▲46金 △同玉
▲37馬 △45玉 ▲57桂迄9手。

初手すぐに37馬とすると35玉、36飛、24玉と逃げられてしまう。どのようにして35~24への逃げ道を封鎖するのか。その答が初手37金と重く打つ手である。45玉に35飛と捨てれば同玉には57馬があるので同歩の一手。35を埋めておいて46金から37馬とすれば桂ツルシが実現する。

論理的な構成のなかに心理的妙手を組み込んで、一桁ものでは作者好みの作品。解説の森信雄氏に、『中段玉の好作で、うまい』という言葉をいただき、最後の3文字に喜んだ覚えがある。

(将棋マガジン H5・9)

第9番



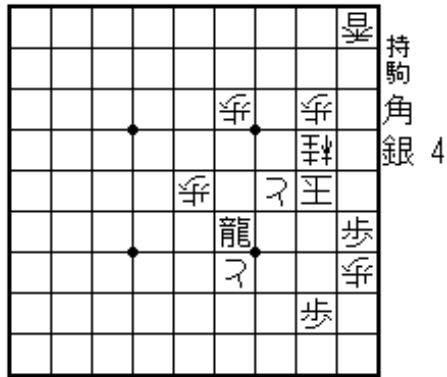
- ▲23銀 △15玉 ▲37角 △26桂 ▲同角 △同角
▲14銀成△同玉 ▲16龍 △同桂 ▲24金 △15玉
▲27桂迄13手。

盤面4×4のいわゆる『四畳半図式』。初形にあわせ、手順もなかなかかわいらしい。初手32角と打つ紛れを乗り越えて23銀から37角と合駒稼ぎにいく手を発見できれば、もう難しいところはない。桂合を同角と切っておとし、14銀成~16龍が決め手。最後は前問と同じく桂ツルシまでの詰上がり。

伊藤果氏に『それにしても中段玉の好きな作者です』と書かれたことがあったが、別にそういう風に意識したことはない。ただ、初形の玉の位置には気を配るほうで、見てもらえば一目瞭然なのだが、(2n, 2m+1)もしくは(2n+1, 2m)に玉が来るように調節している。根がいい加減な性格なので22とか11とか、安定感のある位置に玉があると違和感がある。おかしなものだ。

(将棋世界 H5・12)

第10番



- ▲14銀 △同香 ▲26銀 △同と ▲45龍 △16玉
- ▲25銀 △15玉 ▲16銀打△同と ▲37角 △26と
- ▲36銀 △16玉 ▲25龍 △同と ▲27銀迄17手。

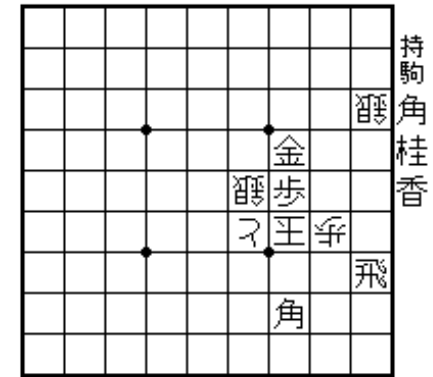
大学4年の夏、たまたま見た将棋世界に載っていた新人コンテストの告知につられて作った作品。これが詰将棋の世界の扉をたたくきっかけとなった。当時の担当者が、私が初めて買った作品集の作者である若島正氏その人であったことも印象深い。

初手26銀、同と、34角は同玉、35銀、33玉、34銀打、22玉、23銀成、31玉で危ないが逃れ。また7手目34角は25香、同角、15玉で不詰。2手目同玉は15銀、13玉、31角以下。また、16銀打を同桂は33角の一発で詰む。変化・紛れの山を乗り越えて37角と打つてからの応酬がテーマ。この初形から龍が消える手順は今みてもすごいと思う。この作品は詰パラにも紹介され、私の出世作となった。

平成5年詰将棋サロン佳作。

(将棋世界 H5・8)

第11番



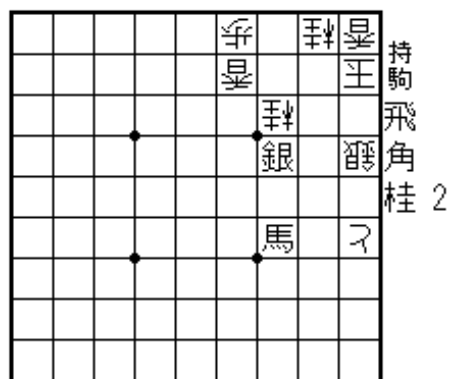
- ▲25角 △同玉 ▲16角 △14玉 ▲27角 △25玉
- ▲15飛 △同玉 ▲16香 △25玉 ▲17桂迄11手。

11手という手数は自分の意識上において超短編と短編の間のエアポケットになっている。9手詰の緊張感をもう2手持続させるのは難しいし、13手詰のように構成にめりはりを付けるのもどうもまくいかない。要するに苦手なのだ。

この作品は創作初期のもので、角先角桂ともいえるテーマをそれほど力むことなく表現している。初手だけと言われればそれまでなんだが、こういうのも一局くらいは、というわけで収録することにした。なお、発表時は26歩→桂だったが、4手目非限定を避ける意味しかないので歩に直してある。

(将棋世界 H5・7)

第12番



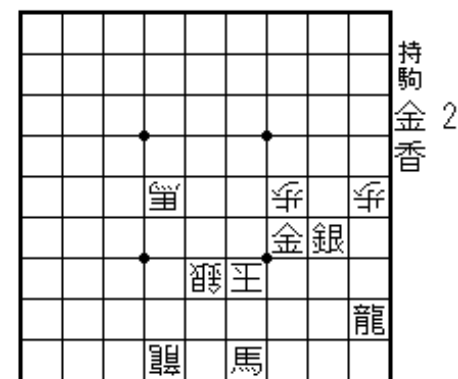
- ▲32飛 △22歩 ▲24桂 △13玉 ▲22飛成△同玉
- ▲32桂成△12玉 ▲13歩 △同玉 ▲35馬 △24飛
- ▲31角 △12玉 ▲23銀成△同飛 ▲24桂 △同飛
- ▲34馬 △同飛 ▲22角成迄21手。

実戦形からの軽い捌きが主題で私らしいといえ私らしい作品。発表時の評価も23銀成のあたりを中心にますます良かったが、中には『老獺さすら感じる』とか『職人芸をみた』などというのもあり、いつまでも若手でいられないことを痛感した。

2手目は香合でもいいようで実はこっそり歩合限定。22香には24桂、13玉、22飛成、同玉のときに31角が好手で早く詰む。変別による誤解を心配したがさすがに詰パラの猛者連、誤解者はたったの1名だった。

(詰将棋パラダイス H6・10)

第13番



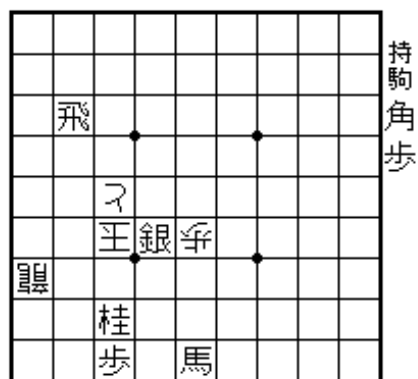
- ▲46金 △同銀生 ▲48龍 △36玉 ▲27馬 △同玉
- ▲37金 △同銀生 ▲29香 △28銀生▲37龍 △16玉
- ▲17龍 △同銀 ▲25銀迄15手。

収束7手は『例の筋』として有名なものであるが、この素材における28の合駒を銀生での移動合で表現できることに着眼して銀生を繰り返す方向に逆算した作品。結果として玉と銀のウェーブを表現することができた。池辺豊『3度の銀不成と焦点打29香は見事。龍馬の不動は残念』南石信雄『これには時間がかかりました。初手から緩みない応酬で今月一番』

池辺氏の言うとおりの、この作品のウィークポイントは玉方龍と馬が動かないこと。初手の紛れが強烈で仕方の無い配置だった。

(近代将棋 H6・10)

第14番



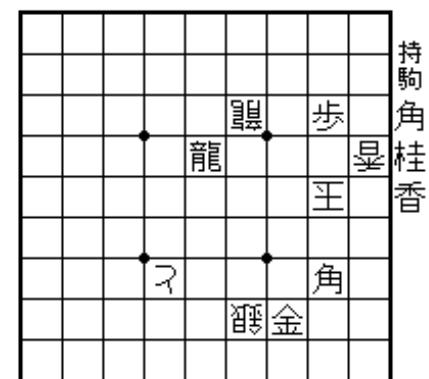
- ▲98角 △67玉 ▲87飛生△同龍 ▲68歩 △76玉
▲58馬迄7手。

たかが7手とあなどるなかれ。貴方は3手目飛を裏返したりしなかっただろうか。それは77歩合で逃れる。発表時には50人もの解答者がこの地雷を踏んづけた。攻め方の利きを遮断する手筋としては新しい筋で、7手で表現すべきかどうかは難しいところだが、手順が完結している点を重視した。

4手目からの変同が嫌われ、発表時の評価はそれほど高くなかったが、なんとか半期賞をいただくことができた。なお、これは発表時から最終手限定のための玉方48歩の配置を省いた改作図。

(詰将棋パラダイス H6・9)

第15番



- ▲36角 △同玉 ▲28桂 △35玉 ▲13角 △24歩
▲36香 △26玉 ▲24龍 △25歩 ▲15龍 △同玉
▲16歩 △26玉 ▲35角成迄15手。

ぼんやりと頭に浮かんだ後半11手が素材。詰方23歩の配置を見付けてなんとか成立することが判明し、後は序奏をどう付けるかというところで作業が暗礁に乗り上げた。いろいろあって難しいところだったが、角から桂馬への打ち換えを採用したのはその意味付けが面白かったからだった。解答者からの評を見るとどうやら正解だったようだ。

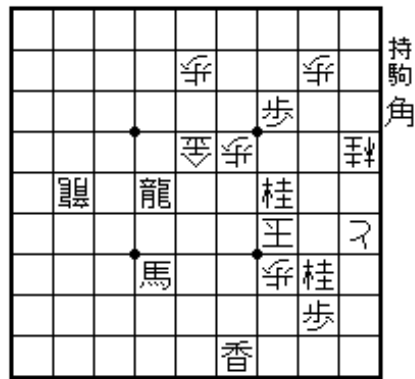
市川博規『初手26香の紛れにはまって丸一日。その後で移った角から桂馬への打ち換えには感動した』

某氏の帽子『初手に香を打った局面と比較する意味で、4手目25玉の方で作意を作るべきだろう』(←そうは思わないが…)

発表時、岸原氏の難解作をかわして首位作となった。自分の作風が認められたようで嬉しかったのを覚えている。

(詰将棋パラダイス H6・11)

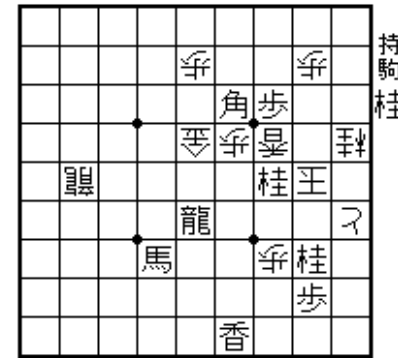
第16番



- ▲66龍 △56桂 ▲同龍 △25玉 ▲43角 △24玉
- ▲23桂成△同歩 ▲26龍 △同桂 ▲34角成△14玉
- ▲23馬 △25玉 ▲17桂 △同と ▲34馬引△14玉
- ▲15歩 △同龍 ▲23馬 △25玉 ▲34馬上△36玉
- ▲14馬 △同龍 ▲35馬迄27手。

2手目56香合は同龍、25玉、36角、26玉、54角、17玉、16龍、28玉、39金、同玉、19龍、29合、57馬で詰む。この難解な変化を読みきるのがまず一苦勞。桂合に決定すると今度は43角に34香合と頑張られた（次頁変化図）ときにどうするかを読まなくてはならない。58馬、24玉、14馬、同玉、16龍、24玉、15龍、33玉、13龍、42玉…詰みそうにない。どこかで間違えた？いや、そうではない。この変化こそがこの作品の主眼なのである。変化図で17桂、同と、16龍と捨てればなんとちゃんと詰むのである。この3手一組の豪快な順が作者の狙い。

以下はさほど難しくはない。23桂成に対する同玉の変化が少し煩わし



変化図（34香合まで）

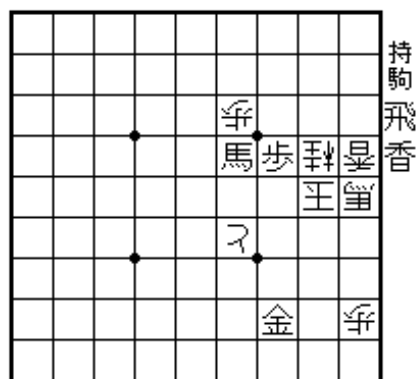
い程度。26龍と捨てると後は馬2枚が主役が変わる。ちょっと興味向っぽい手順を展開し、最後は14馬が決め手となって還元玉での詰上がりとなる。

この作品は若島正氏作（詰パラH4・10 B級順位戦）が元ネタで氏の構想を馬2枚で表現したことになる。ところが、宗岡博之氏がまったく同じ思考からやはりこの馬2枚で捕まえる構想の作品を発表したのは驚いた。しかしそこで作風の違いは出るもので、私の作品は氏の作品に比べると、構想自体にひねりが入っているかわりに、形と手数にやや皺寄せがきていると言えよう。

収束探しがなかなかうまくゆかず、私としては創作期間の長い作品。構想部分と収束を連結させる35桂の配置を見付けたときに『やった！』と思わず声に出してしまったことを記憶している。変化が難解になってしまったが解後感は悪くなく、構想が予定どおりに表現できた点などにおいては自信作と言える。

（詰将棋パラダイス H7・2）

第17番



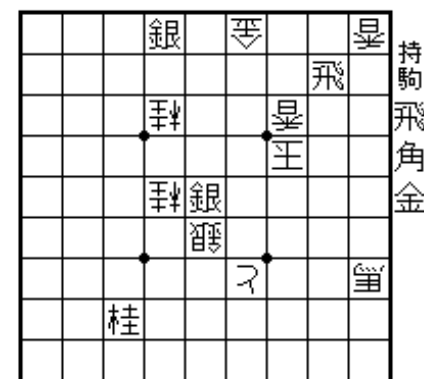
- ▲28香 △26馬 ▲35飛 △16玉 ▲15飛 △同馬
▲17馬 △同玉 ▲27金迄9手。

捨て合や移動合にはときには捨て駒以上のインパクトを解答者に与えることができる。かくいう私もそのインパクトに惹かれてこの世界にはまったクチだった。そのインパクトだけで作品になるかどうかはまた別問題とは思いますが、この作品は2手目の移動捨て合がテーマ。意味付けが取られないため、というのは珍しいのではないかと思う。収束が帳尻合わせみたいな感じを受けるのは仕方がないところか。

手数が一桁の作品は配置駒数も一桁に、というのが私の創作における原則だが、前にも書いたように根がいい加減なため例外が結構多い。これもそのひとつだが、それでも苦勞に苦勞を重ねて最低限におさめたつもり。お願いだから改作案など出さないでほしい。自分の才能の無さがばれてしまうから。

(将棋世界 H6・11)

第18番



- ▲64飛 △35玉 ▲26金 △同馬 ▲53角 △45玉
▲44角成△同馬 ▲25飛成△35馬 ▲44飛 △55玉
▲35龍 △同香 ▲66角迄15手。

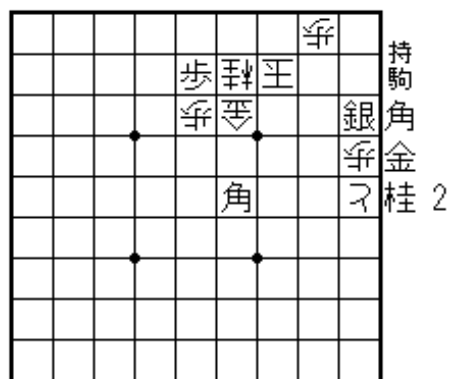
初期の中では1, 2を争う難解力作。盤面13枚、歩なしのゴツゴツした初形からも窺い知ることができる。

主眼は初手の限定打。54飛でも同じようにみえるがそれは44桂、45角に35玉でなんと逃れる。64飛なら44桂合には43角、同玉、54銀がある。だからといって54銀を消す44金合なら今度こそ45角、同銀、25金が成立する(この変化のため、74以遠では詰まない)。

54桂・44桂の連続桂合を消すための3桂配置や初手に比重がかかりすぎている点など、不満な部分も多かったが、狙いを汲んでいただいて、初参加のD級順位戦、5点満点で4・59のスコアでトップ昇級を果たすことができた。

(詰将棋パラダイス H5・12)

第19番

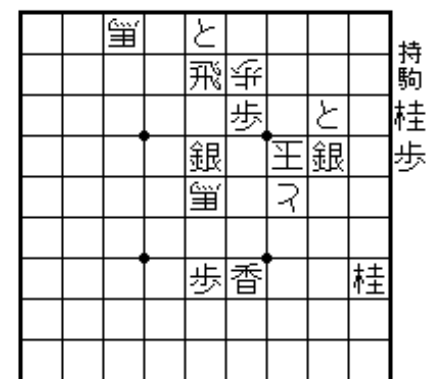


- ▲24桂 △33玉 ▲23角成△同玉 ▲12角 △33玉
- ▲32桂成△同玉 ▲44桂 △33玉 ▲23角成△同玉
- ▲24金迄13手。

この作品は私の短編における理想である。なんせ解説の必要がない。やろうとするだけ野暮だ。盤に並べてでも目で追うだけでもかまわない、見ればそれでわかる。詰将棋というイノセントワールドを心置きなく楽しもう。

(将棋世界 H5・12)

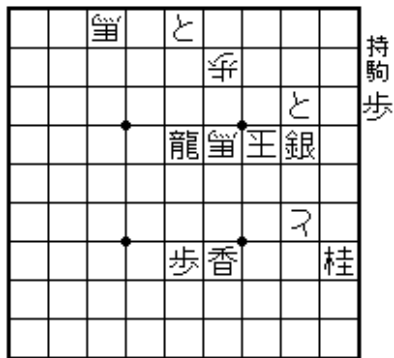
第20番



- ▲26桂 △同と ▲45銀 △同馬 ▲54飛生△43玉
- ▲52飛成△34玉 ▲54龍 △44馬引▲同龍 △同馬
- ▲52角 △43馬 ▲同角 △同歩 ▲25角 △同と
- ▲35歩 △同と ▲33銀成迄21手。

初手からの4手は軽い序奏。まあ迷うようなところはなく、舞台を整えるくらいの役割しかない(でもどうしても付けたかった)。5手目からいよいよ物語が始まる。すぐに54飛成とすると、44馬引とされてあっと驚く打歩詰。そこでいったん54飛生としてみる。43玉に52飛成とするしかないのでは意味がないように見えるが、次頁途中図を見ると一ヶ所だけ違う。そう、43歩が無いのである。同龍から52角とする手がこれにより成立している。以下43合に35歩、同馬、33銀成まで。ん、なんかおかしい。そうか、と膝をたたく。52角には43馬だ。まだ打歩詰。同角から25角で打開して、ついに大団円となる。

手順をおおまかに解説したが、これは作図過程にそのまま一致している。移動合による打歩誘致を作っているうちに生による邪魔駒消去が飛び出し、



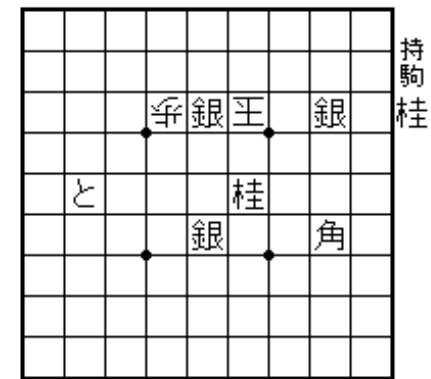
途中図（44馬引まで）

さらに収束で悩んでいたら再び馬の移動合がでてきて、あとは歩を取らせると金を置いたら出来上がっていた、というもの。ツイていた、と言えばそれまでだけど、まあこれでも苦労はしているのだから少しは自分を誉めてあげたい。初手でどこせたと金を最後に元に戻して詰上がり、というのがストーリー性があって、構成を重視する私としてはお気に入りの部分である。

大学最後の半年間はもう詰棋三昧の生活だった。あまりたいした作品はできなかったが、この作品はその半年間の総決算として位置づけられる。いやしかし、詰将棋にはまったのがほとんど卒業決まってからで本当に良かった。もしこれが大学入りたての内に染まっていたら、これを書いている今もまだ大学生だったかもしれない。いや、間違いなく大学生だっただろう。（笑）

（近代将棋 H6・10）

第21番



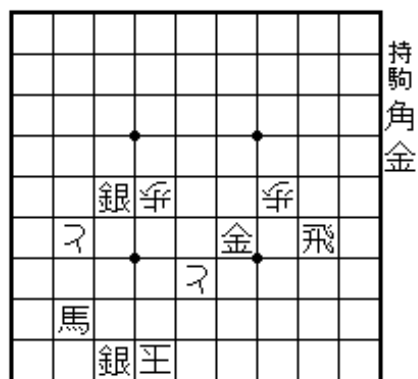
- ▲35桂 △54玉 ▲44銀成△同玉 ▲43桂成△同玉
- ▲53馬迄7手。

悩まれた人もいるかと思うが、実はたったの7手詰。初手の角筋を遮って打つ桂馬が作者の狙い。55桂の方が明らかに有利そうに見えるのだが実はそうではない。トリックは4手目の変化にある。初手55桂なら4手目同玉とは取れないが64玉で逃れることができる。しかし35桂の場合、4手目64玉はひょいと引く37角で一発となるのである。つまり打った桂馬が邪魔駒にならないように35に打つ手が成立する。ロジカルに、しかも簡明にできている点は今見ても評価できると思う。

この作品は就職前の健康診断で仙台に行ったときに泊まったホテルで作った。この健康診断で自分が慢性肝炎であることが判明するのは一ヵ月後の話。内定取消になるかとひやひやしたが、なんとか就職できて現在に至っている。取消になっていたら詰将棋どころの話ではなかったかもしれない。今になって幸運を感じている。ばちあたりなヤツだ。

（将棋マガジン H5・6）

第22番



- ▲29飛 △58玉 ▲49角 △59玉 ▲68銀 △同と
- ▲94角 △48玉 ▲66馬 △同歩 ▲38金 △同玉
- ▲83角成△48玉 ▲47馬迄15手。

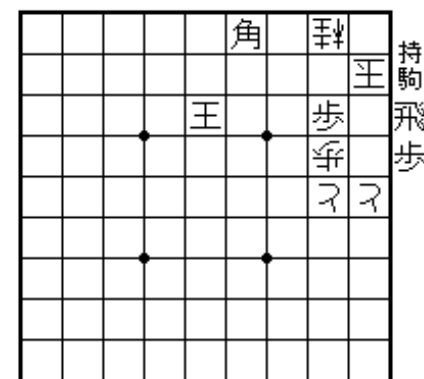
解説・柳田明『94角!と最遠地点に開王手するのが狙いの一手。これは勿論83角成とするためだが、これを68銀と66馬のふたつの捨駒でカモフラージュしているので簡単には見破れない。特に5手目の時点では構想が見えないので68銀が非常にやりにくくなっている。

変化も紛れも相当あり、よくそれらを乗り越えて作意を成立させている。これで形こそ広がっているものの盤面10枚なのだから大したものだ。今月の話題作である』

柳田明氏はいまさら私が紹介するまでもない名作家にして名解説者。是非がはっきりしている割に嫌味のない文章が書ける、詰棋界になくてはならない人である。その名解説者に上記のようにほめられた作品は本当に幸せものと思う。塚田賞受賞作。

(近代将棋 H7・1)

第23番



- ▲42飛 △32金 ▲同飛成 △13玉 ▲22龍 △14玉
- ▲12龍 △13飛 ▲同龍 △同玉 ▲14歩 △同と
- ▲12金 △同玉 ▲42飛 △13玉 ▲22飛成迄17手。

双玉を使った戯作で2手目意外なところに飛び出す金の捨合がすべて。手を進めると自然に意味付けがわかる親切設計で合駒選択も煩わしくはなく、収束も悩むことなく流れるがまま詰んでしまう。途中非限定が何箇所かあるが、大道棋の客寄せ作としては、別に気にするほどでもないと思う。

なお、11手目12金とすると同玉で振り出しに戻ってしまう。はまる人がいたら相当楽しい。

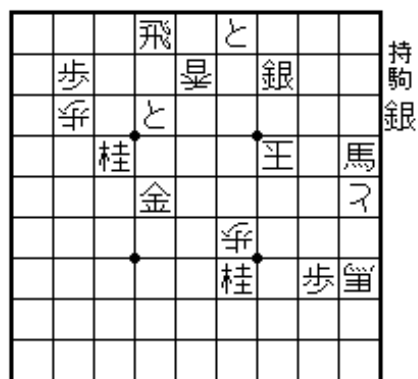
梅本拓男『この形で金の中合が入るとはびっくり。13飛の逆王手も味が良い』

河野剛『簡素な構図で32金合と13飛合で客寄せ商売成立』

出題時には冗談で『ウェルカム』という命名を付けていたが、今回は取っておいた。作品だけで十分冗談になっているので(笑)

(詰将棋パラダイス H6・2)

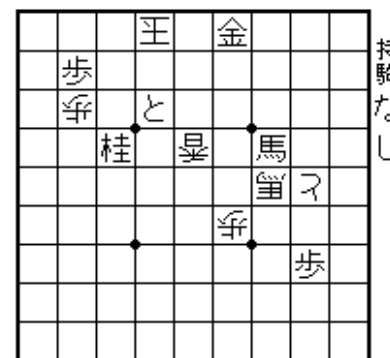
第24番



- ▲25銀 △同と ▲23馬 △44玉 ▲54金 △同香
- ▲43銀成△同玉 ▲42と △44玉 ▲43と △同玉
- ▲41飛成△42金 ▲35桂 △同馬 ▲42龍 △同玉
- ▲32金 △51玉 ▲41金 △61玉 ▲34馬 △43桂
- ▲同馬 △71玉 ▲61馬 △同玉 ▲73桂 △71玉
- ▲81歩成迄31手。

阿部健治『…(前略)…それにしてもすばらしい作ですね。54金も35桂も、もちろん手としては考えましたが、その意味がわからないから一本の線で結ばれない。34馬から質駒狙いの筋が浮かんでやっとストーリーが見えました。この繊細な手順を生む配置が見事です。手順前後は利かないし、変化もピツリ割り切れている。また53との誘い手がいかに強力。収束も桂中含から馬を捨て切って幕、とは完璧な仕上げりじゃないですか。まさに会心作ですね』

いわゆる構想物をおっかなびっくり近代将棋に発表したその月末に届いたのが、当時詰パラで高校を担当していた解答強豪阿部健治氏からの上記



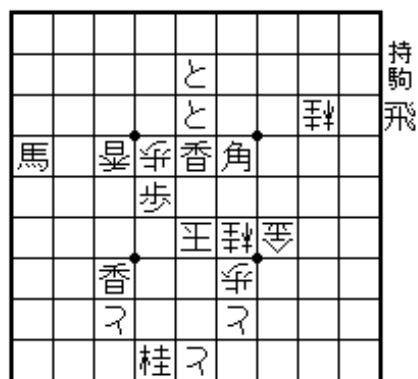
途中図(34馬まで)

の手紙だった。これを読んで舞い上がってしまったのは言うまでもないこと。これほど作者の意を汲んでくれた文章にはそうはお目にかかれるものではない。

34馬を王手にするための54金と、馬をわざわざ近づけるようで実は質駒化する35桂を組み合わせ、構想中編としては面白い作品になったと思う。さしたる評価は受けなかったが、阿部氏の言うとおりに、間違いなく会心作である。

(近代将棋 H6・6)

第25番

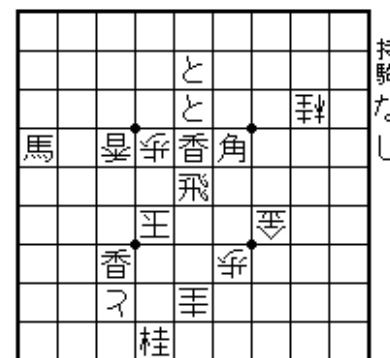


『風の坂道』

- ▲55飛 △66玉 ▲57飛 △65玉 ▲55飛 △66玉
- ▲59飛 △65玉 ▲55飛 △66玉 ▲85飛 △55桂
- ▲67歩 △同玉 ▲65飛 △56玉 ▲55飛 △66玉
- ▲58桂 △同と ▲同飛 △65玉 ▲55飛 △66玉
- ▲85飛 △55桂 ▲67歩 △同玉 ▲65飛 △56玉
- ▲55飛 △66玉 ▲58桂 △同桂成 ▲35飛 △56玉
- ▲36飛 △45玉 ▲46金 △44玉 ▲43と △同玉
- ▲53香成△44玉 ▲45金 △同玉 ▲72馬 △55玉
- ▲54馬迄49手。

この作品集、配列の仕方をどうするか、かなり迷ったのだが、考えた挙句、私らしく適当に並べた。それでも唯一、最初から決めていたのが、この作品を最後にもってくることだった。つまり、代表作である。

持駒変換→と金ハガシの趣向作。手数は短いがなかなか楽しい順が展開される。序に軽い邪魔駒消去（3手目すぐ59飛は55歩とされ67歩が二歩で打てない）を行なって趣向手順へと入る。この趣向部分はおそらく



途中図（同桂成まで）

オリジナルなものだろうと自負している。オリジナルでもつまらなければ仕方がないが、この飛の上下左右の舞は最頂目なしに面白いと思う。意味付けも非常に明快。つまり46の桂を飛ばせた上図から35飛として玉方の金を取りにいくのが狙いというわけ。収束も邪魔駒消去（序と収束を邪魔駒消去で統一したのが作者のささやかな主張）から72馬でうまく纏めることができた。手数が短すぎた点もありさしたる評価は受けなかったが、私の作品群の中では確固たる位置をしめている作品である。命名『風の坂道』は私の好きな歌の名前から取ったもの。手順のさわやかさにマッチして気に入っている。

最後はやはり解答者からの評でしめたい。北村憲一氏ではないが、本当に解答者は神様であると思う。これからも解いてくれる方に少しでも喜んでいただけるような作品を作るよう努力したい。

室井哲哉『質金？入手の構想に脱帽。開き王手の反復による飛の運動はおもしろく、収束も簡潔でよい』

（近代将棋 H6・1）